

## 「大人の性教育」

10月22日、男女共同参画講演会「大人の性教育」が、With You さいたままで開催され、むとう葉子市議が参加しました。プログラムは、「おとなたちは『性』をどう学んできたか ～性別・世代の違いを意識しながら～」と「生理から考える社会課題～『生理の貧困』を起点として～」の2部に分けられ、前者の講師は元一橋大学・津田塾大学講師の村瀬幸浩氏と後者の塩野美里氏からの講演でした。

### 【村瀬氏の講演】

村瀬氏は、日本の性教育がどのように変化したか、どこに問題があるのか、課題を掘り下げて説明し、今後の性教育への展望を語りました。

戦後、最初に日本政府が行った政策は、「外国軍駐屯地における慰安施設に関する内務省警保局長通達」という占領軍への慰安計画でした。1945年8月18日で、何と戦後の日から三日後でした。その口実は、占領軍から「一般婦女子」の「純潔」を守る『防波堤』というものでしたが、実際は新聞広告などで集めた女子(5万5000人)を占領軍慰安婦としてさし出すものでした。しかし、この施設は性病の蔓延により8ヶ月で閉鎖され、働いていた女性は放り出され、街かどの街娼(私娼)となっていったという歴史がありました。

○道徳教育としての性教育から科学・人権教育としての性教育へ

道徳教育の性教育は、「純潔」「良妻賢母」「母性」など女性の在り方、生き方を枠組みにはめ込み男尊女卑の考え方が支配しています。また性被害、人工妊娠中絶、不純交遊の指導の対象も、いつも女性に厳しかったことも同様です。

今、性別に関わりなく、一人一人にある人権として、また性の事実を科学として捉え直すことが求められています。

別姓の性から共生の性、自身の性から「関係」としての性への発展や本能としての性から文化としての性へ、根本的に切り換えることが必要です。不幸にならないための性の学びから幸せに生きるための性の学びを追及したいと語りました。

### 【塩野氏の講演】

塩野氏は、大学の友人と会話する中で、生理がある人もない人も生きやすい社会をどのように作れるかを目指そうと「#みんなの生理」を立ち上げました。生理について話せる場所の創出を行い、調査や発信をして必要な場所には生理用品の設置や送付を行う活動をしています。これまで生理に関する知識は、女性に限られており、女性であっても正しい知識があまりないのが現状です。1回の経血の量、生理に伴う症状(病的な症状)、更年期の状況など。また生理に関する社会状況として学校や職場の理解や世間のタブー視をどのように解決していくのか、経済的な負担が大きい低用量ピルの課題など、今後もみんなの声を集め、政治を動かすための活動を行っているとのこと。今後の活動にも期待の声が集まっています。